# 60th GALAXY AWARD

# 放送批評懇談会創立60周年
# 第60回ギャラクシー賞贈賞式



放送の優秀な作品・個人・団体を顕彰する賞として「国内最高の栄誉」とも称されるギャラクシー賞。その第60回贈賞式が5月31日、都内のホテルで開催された。60回という大きな節目であると同時に、4年ぶりに従来と同じ形で、多くの関係者を会場に招いて開催できたことで、主催者にとっても感慨深い記念回となった。

応募・選奨された作品は、テレビ・ラジオ・CM・報道活動の4部門合わせて884本。CM部門が今回からウエブ作品も募集し、61作品が応募されるなどの変化もあった。また、今年は放送批評懇談会の創立60周年にもあたり、「放送批評懇談会60周年記念賞」がタモリさんに贈られた。

会場に集ったのは、放送・広告・芸能・メディア関係者など約600人。4年ぶりに開催された懇親会も合わせて、喜びと感動と熱気が会場に満ちていた。コロナ禍で始まったユーチューブでのライブ配信も3回目。平均で7000近く、最高1万7000の視聴を記録、ギャラクシー賞史上、最も多くの人が目にする贈賞式となった。（受賞理由などは7月号を参照）



司会はジョン・カビラさんと長野智子さん





60th

## ❖放送批評懇談会60周年記念賞
### タモリ

半世紀近く第一線で活躍し、鋭い批評性に裏打ちされた知的な笑いで存在感を示したとして表彰されたタモリさん。「私、この世界に入りましてずっと活動してきたんですけども、ほぼ半分は非難の歴史でした。まず最初に『テレビでサングラスをかけるな』ということから始まって、ひどいことやってました。白いブリーフ1枚でイグアナやったりなんかして、非難は当然だと思うんです。が、ここいらで褒められ始めて、ちょっと気持ち悪く思ってるんです」と笑わせたあと、「批評性だなんて、過大評価。ひねくれてますから、それが出てるだけで批評性はないと思います。僕は挫折の歴史だから。根性がないので、面白いなってその分野に行くと、先人たちのすごい人がいっぱいいるのですぐ諦める。で、また次に行って……もうやることなすこと中途半端ってやつですから、それ言われると恥ずかしいんです」と謙遜する。

坂道に造詣が深いタモリさん。司会者が渋谷の坂について水を向けたところ、九州から上京して初めて地下鉄銀座線に乗り、渋谷まで来たら突然地上が現れた驚きが、その後、坂道に興味を持つきっかけになった、渋谷が原点だったというエピソードを明かした。奇しくもその渋谷での贈賞式となった。

最後に「今、地上波ってちょっと下り坂になってるみたいですけど、まだまだやる余地があると思うんで、今後それを見つけてまたやっていきたいと思っております」と語り、冒頭で司会者が選評の紹介のところで「類まれな足跡（そくせき）」を「あしあと」と読み間違えたのを受けて、「足跡（あしあと）を残したい」と絶妙の返し。さらに「泥棒じゃないんですから」とユーモラスな一言を添えて、会場を沸かせた。



来賓祝辞
日本民間放送連盟会長
遠藤龍之介さん



来賓祝辞
NHK専務理事
山名啓雄さん


















## ❖テレビ部門 大賞

冤罪をテーマにテレビのあり方を問うた**「エルピスー希望、あるいは災いー」**。関西テレビプロデューサーの佐野亜裕美さんは「尋常でない数の方の協力がありました。2016年の終わりから渡辺あやさんと脚本を作り始めたんですが、業界や社会への怒りを二人で朝から日暮れまで愚痴り合ったのが始まりでした」と明かした。

「向こう見ずな性格ですから、タブーに切り込んだという意識がないまま放送して、『大丈夫だった?』『すごいリアルでびっくりした』という声を他社の方からもいただいて驚きました」と言う。

大賞決定で改めて登壇した大根監督は「マーちゃんと（眞栄田）郷敦さんのコンビが素晴らしく、人の真剣さとか、悩みながら役を作り上げていく過程を間近で見られた。スタッフとキャストは、素晴らしい、強すぎる脚本に、どうすれば応えられるかってことだけを考えていた」。

個人賞とのダブル受賞になった長澤まさみさんも「みんなが自分のことではなく、作品のことに一生懸命になっていました」と語った。

## ❖テレビ部門 優秀賞



米軍基地による水質汚染を報じた沖縄テレビ**「水どぅ宝」**ディレクターの平良いずみさん。「息子が１歳のときに、汚染物質が入ったミルクをわが子に与えていた」ことを知る。「怒りと不安とで震えが止まりませんでした。この賞は声を上げて行政を動かした市民の勇気に与えられたと思います。津嘉山正種さんのナレーションは、慟哭に近い沖縄の叫びです」。



BS-TBS **報道1930「激震・旧統一教会と日本政治」**キャスター編集長の松原耕二さん。受け取った賞状に記された「権力に萎縮することなく報道の矜持を示す」という言葉に「これが最大の今後へのエールだと受け止めております。われわれは宗教の問題って、やってるようで正直あんまりやっていなかった。これからも忖度なく行きたいです」。



**「世界サブカルチャー史　欲望の系譜　シーズン3」**で戦後日本のサブカルチャーを体系化したNHKエンタープライズエグゼクティブプロデューサーの丸山俊一さん。「時代の空気を主人公にするというのは無謀な試み。緻密な構成が必要で、これが正解とは思ってなくて、見る方がこの上で新たな可能性を感じられる、そんな開かれた作り方ができればという挑戦でした」。




## テレビ部門

### ❖テレビ部門 個人賞
### 長澤まさみ

「たいへん栄誉ある賞をいただき、光栄に思います。昨年はさまざまな作品の撮影に行き、２週間に１回はナレーションを録りにいく、どっぷり作品づくりに浸った１年になりました。私がその一つひとつをやり抜くことができたのは、やはり近くで支えてくださった監督、そしてスタッフの皆さんのおかげだなと再実感する１年にもなりました。本当に素敵な賞をいただき、とても嬉しいです」と喜びを語った長澤まさみさん。

そこにサプライズゲストとして「エルピス」監督の大根仁さんが登場。

「昨年のテレビドラマ界を振り返ると、やっぱり僭越ながら『エルピス』と『鎌倉殿（の13人）』は2022年を代表する作品だったと思います。その２作品で主演とナレーションという重要なポジションを演じられたマーちゃんがこの賞を受賞するのは本当にふさわしいし、当然だと思います。これからますます日本を代表する俳優になっていくと僕は思っております。僕はマーちゃんが20代のときに『モテキ』という作品を撮りました。そのときは一番可愛い長澤まさみを撮れたと自負しております。今回の『エルピス』では30代の一番かっこいい長澤まさみが撮れた自信があります。次は40代の一番美しい、華やかな長澤まさみを撮りたいと思っていますので、そのときはよろしくお願いします」と祝福した。







## ラジオ部門



### ❖ラジオ部門 大賞

本土復帰前から米軍のステージで歌い、87歳の今も現役のジャズシンガー、齋藤悌子さんを取り上げたドキュメンタリー、**RBCiラジオスペシャル「ダニーボーイ・齋藤悌子、ジャズと生きる」**。琉球放送メディア本部ラジオ局局長の狩俣倫太郎さんは、「悌子さんはアメリカ進駐軍が沖縄にまだいた時代に、米軍基地のステージに立ってジャズを歌い始めた。非常に難しい状況でしたが、それでもまったくブレることなく、音楽が大好きという一念をしっかりと貫いてきました。そのしなやかさや強さを皆さんに受け取っていただきたいなと思って作った作品が評価されて、心から嬉しいです」と喜んだ。戦争の不条理を浮き彫りにした番組だが、「前向きで明るくてチャーミングな悌子さんの人柄を伝えて、社会が元気になってほしいと思いました」。





### ❖ラジオ部門 優秀賞

FM TANABEの**講談風大河ラジオドラマ「弁慶記」**。「地元の偉人の勇姿を届けることで地域社会の皆さんが少しでも前向きになるきっかけが作れれば」と企画意図を語った大﨑健志さん。「地域の方が一生懸命に台詞を読んでくれて完走できました」。



TBSラジオ**「荻上チキが見たウクライナ」**。「埋葬する時にシャベルで土をかける音とか、マイク1本だったからこそ録れた音声があった」とTBSグロウディアの菅谷優駿さん。「大きなメディアでは報じられない声を掬い上げました」。



RKB毎日放送**「仲谷一志・下田文代のよなおし堂」**。登壇した仲谷さん（左）は、よく知る市場で発生した火事現場にスマホを持って駆けつけた。番組のリポートにしようというのは後から決まったこと。「予想のつかないところに辿り着くのが生ワイドです」。











### ❖ラジオ部門 DJパーソナリティ賞　安住紳一郎

「日曜天国」のテーマ曲に乗って登壇した安住さん。「光栄です。本当に嬉しいです」の言葉に続けて、「1997年に就職して、すぐに先輩に言われたのは、『ラジオはもうなくなるだろう』。じゃあなるべく関わらないほうがいいなと思って26年。本当にいいことはほとんどありませんでした。ポッドキャストやるよって言ったらラジオクラウドにしてくれって言ってきたのにやっぱり戻してくれってなったり、新しい動画メディアとか出てきて、負けないように少しバズるようなことも盛り込んで発言したら、（某スポーツ紙に）好きなように書かれて、ラジオも聴いてない人にネットの記事だけ読んで炎上されたり、もう心に塗る薬がありません」と、ぼやき節。「でも続けています。ラジオが好きと言ってくださる全国の皆さんがいるから続けてこられたと思っています」と締めた。さらに、「この賞取ると、局内では若干嫉妬の対象になるんですよね……この賞の枠、もっと増やしてください！」と会場を盛りあげた。

## フロンティア賞




### 「FIFA ワールドカップ カタール2022」生中継

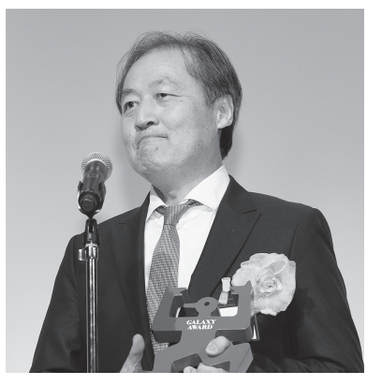
サイバーエージェント執行役員の野村智寿さん（左）は「全64試合無料生中継が決まって、前回大会のデータを緻密にシミュレーションした結果、日本のインターネットの限界までいく可能性があると。64試合落ちることなく高品質でお届けすることが勝負ポイントでした。日本代表の大躍進があって盛り上がり、アベマの視聴者数も右肩上がりで、最後は1秒単位で視聴状況をリアルタイムに見ながら安定した配信に努める作業で痺れました」。テレビ朝日スポーツ局プロデューサーの河本祐典さんは「かつてない規模の制作体制でした。海外サッカー中継は本当にトラブルが多いんですが、2001年にアジアのサッカーの放送権を獲得してから先輩方が築いてきたノウハウのバトンを引き継いで、魂込めて作れた。20年間の集大成をテレビ×ネットの力を通してお伝えできたのではないかと思います」。



## テレビ部門

### ❖テレビ部門 特別賞　「映像の世紀バタフライエフェクト」





「2001年に新大久保駅で韓国人留学生らが転落した人を救おうとして亡くなった事故があり、しかしその数年後、同じような事故では助けることができた。記事を見た寺園慎一プロデューサーが、『そのときには報われなかったとしても、一人の勇気が時空を超えて見知らぬ誰かに影響を与え、時には奇跡を起こす。世界はそういう人々の小さな営みの積み重ねではないか。これを番組でやろう』と言ったのが始まりです。『映像の世紀』と重ね合わせてやっていこうと考え、昨年4月に始まりました」とNHKメディア総局文化・エグゼクティブディレクターの岩田真治さん。受賞については、「自分たちがこれからどういう方向で番組を作っていったらいいのかというときに大きな励ましをいただいた。ここを新たな出発点にして、また次に向かっていけるように頑張っていきたい」と謝意を述べた。

## 報道活動部門



### ❖報道活動部門 大賞

ドキュメンタリー素材を平和教材に活用した広島テレビ放送。「開局以来、原爆に関するドキュメンタリーを200本以上制作してきたけれど、放送という役目を終えるとアーカイブ室に眠ってしまう。今は聞けない被爆者の貴重な証言をどうにか未来に繋ぎたいと考えて、子どもの平和教材を作ることにしました。もともと子ども向けに作っていない番組をインターネットに掲載するので、先生方からあまりにも悲惨な映像を見せるのはどうかという指摘もあった一方で、今の子には映像が身近で伝わりやすいという意見も。1月に英語版が一部できたばかりですが、アメリカの高校教師から利用したいと言われました」と報道制作局報道部ディレクターの鶴紗也子さん。





### ❖報道活動部門 優秀賞



地域で根を張る旧統一教会をめぐる問題をいち早く取り上げたチューリップテレビ。「旧統一教会と接点のある政治家や議員となかなか関係が結べなかったり、本当に地道で根気のいる取材と交渉が求められた」とキャスターの毛田千代丸さん。



精神医療の実態に迫ったNHK。看護師の虐待も炙り出し、警察も動いた。「防止できる仕組みができるか、そこに踏み込んでいきたい。受賞で、勇気を持って証言してくれた方や弁護士に報いられて嬉しい」とチーフプロデューサーの真野修一さん。

## マイベストTV賞グランプリ

### ドラマイズム「美しい彼」（シーズン2）

『劇場版　美しい彼～eternal～』の舞台挨拶から駆けつけた二人。２年連続の受賞となった感想を聞かれた萩原利久さんは「1年経って、またこの場に立てることを本当に嬉しく思います。本当にたくさんの視聴者がこの賞を喜んでくださいました」。八木勇征さんも「シーズン2、映画ときて、皆さんの愛を真っすぐ何度も何度も感じることができました。チーム全員で本当に幸せです」と喜びを語った。シーズン1から2までの期間が短かったことから「久しぶりっていう感覚のない初日」（萩原）だったとか。グランプリ選出の投票に参加したGメンバー（放送批評懇談会オンライン会員）から選ばれたプレゼンターの感激ぶりも微笑ましく、会場をなごませた。







## 志賀信夫賞



**岡崎 栄**　演出家、脚本家

「今日のために久しぶりに出したスーツがぶかぶか。172センチあった身長が158センチになって、小さくなったせいなんです。93歳になると大変ですよ。でも、電話もらって志賀信夫賞あげると言われて、いいことありました」と笑いを誘う岡崎さん。1961年に演出した大ヒットドラマ、NHK「若い季節」の出演者の黒柳徹子さんから、ビデオで「小野田勇さんの台本が遅いから、ビショビショに濡れてお酢の臭いがする台本の（湿式）コピー紙をみんなで持って台詞を言ったの、昨日のことのように思い出すんですけど、どんなに岡崎さんが大変だったろうと思います。またゆっくりご飯でも食べましょうね」とサプライズメッセージが届いた。

## CM部門

### ❖CM部門 優秀賞



コワモテ風のラッパー、呂布カルマさんを起用したキャンペーン**ACジャパン「寛容ラップ篇」**。「エンタメ性を持たせるためにキャスティングと演出には苦労した」と常務理事の佐藤隆之さん。「放送直後から、かつてない速さ・深さで広がり、大変な反響をいただきました」。



**サントリーHD「人生には、飲食店がいる。」**は映画のシーンを繋いで飲食店を応援。「創業以来、飲料で人と人を繋ぐことを大事にしてきた。飲食文化を一緒に作ってきた大事なパートナーが苦境に立たされている。何かできないかと思いました」とクリエイティブディレクター安永翔さん。



**東海旅客鉄道「会いにいく、が今日を変えていく。」**は「会いにいく」がテーマ。「コロナが明け、トンネルを抜けていく。それが伝わるようUAさんに歌を依頼しました。『新幹線に乗りたくなった』『人に会いに行きたくなった』など、手応えがありました」と常務執行役員の木村中さん。



### ❖CM部門 大賞

受験生の1年間を斬新な視点で描いた**大塚製薬カロリーメイト「狭い広い世界で篇」**。「2012年からカロリーメイトが受験生を応援してきたシリーズの9作品目。その年にしか描けない受験生を等身大で描くのがテーマです。前は受験勉強中にスマホを使ってはいけないという概念がありましたが、コロナを経てパートナーになっているとわかり、スマホ画面から一緒に受験生を応援しました。縦長フレームには、見たことのない世界観だと驚かれ、大きな反響をいただきました」とニュートラシューティカルズ事業部宣伝部係長の梶綾子さん。





文／飯田みか　写真／岩尾克治、官野 貴、花井健朗、船元康子　デザイン／中島好登